

『今月の天候と農作業』

通巻第5639号

5月号

令和2年4月30日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高い見込みです。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 5月2日(土)～ 5月8日(金)

前線や湿った空気の影響で、曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2 週目の予報> 5月9日(土)～ 5月15日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 5月16日(土)～ 5月29日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 水管理と病害虫防除

茎数が株当たり20本程度になったら、無効茎抑制や根の健全化、倒伏軽減のため「中干し」を行います。落水は5～7日で、軽く足跡が付く程度とします。

「いもち病」の予察情報に注意します。気温が高く、曇りや雨が続くと、発病が早くなり多発生になる恐れがあります。肥料が効いて葉色が濃い場合は、特に注意が必要です。補植用の苗は、発生源になることがあるので、残っていれば、すぐに処分します。発生を確認したら速やかに防除します。

2 穂肥

月末から6月上旬にかけて穂肥の時期です。コシヒカリは倒伏しやすいので、幼穂長が1センチの時期が適期です。気温が高ければ生育が早まるので幼穂を確認し、遅れないよう施用します。施用量は食味や品質に影響するので、葉色を見て決めます。一発タイプの肥料を使用している場合は穂肥は必要ありません。

◆普通期水稲

1 田植時期と土づくり

ヒノヒカリは早植すると出穂も早くなり、高温に遭い白未熟粒が多発する恐れがあるため、極端な早植は避けます。また、深耕で十分な作土層を確保するとともに、ケイ酸質資材や有機物を施用し、土づくりに努めましょう。

2 育苗管理と田植え

塩水選後「馬鹿苗病」等の防除のため種子消毒を行います。籾に気泡が付いていると薬剤の効果が落ちるので、籾袋を揺すり気泡を抜きます。

出芽時が高温であったり日数が長くなると、苗が徒長し病害が発生しやすくなります。芽の長さが1センチ程度で緑化に移り、その後も高温多湿に注意します。田植時には、いもち病等の防除で薬剤の箱処理を行います。余った苗は、補植後すぐに処分します。

◆麦類

1 収穫作業

成熟期の目安は穂首が黄化し穀粒からも緑色が抜け、爪を立てるとロウくらいの硬さになった頃です。コンバイン収穫の場合はその数日後（水分30%以下）とします。収穫後高水分のまま長時間経過すると品質が低下するので速やかに乾燥します。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆きゅうり

日中の気温上昇と、日射量の増加に応じてかん水量を増やします。また、葉に強い直射日光が当たると、葉の老化や葉焼け症等が発生するので、日中は内張カーテン等を利用し、日射量を調節します。湿度の低下は、曲がり果や尻細果等の発生につながるため、ハウス内が乾燥している場合には、通路散水等による湿度確保に努めます。

◆ピーマン

夜温が上がり、暖房機が稼働しない日が続くと、ハウス内の湿度が高まり病害が発生しやすくなります。ハウス外の最低気温が14℃以上の場合には、内カーテンは開けたままにし、暖房機が稼働するように管理します。また、日焼け果等の発生防止のため、日中は内カーテン等を利用し、日射量を調節するとともに、換気に努め、ハウス内の温度は30℃以下で管理します。

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等による白果や収穫遅れによる赤果、成り疲れ等によるうどんこ病の発生が予想されます。適期収穫を徹底し、光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行います。また、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下するため、こまめなかん水・追肥による草勢維持に努めます。

◆トマト

ミニトマトは気温上昇に伴い裂果が多くなるので、かん水量に注意します。また、空中湿度を下げるために日中の換気を徹底し、収穫遅れがないよう適期収穫に努めます。

大玉トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるので、かん水量を徐々に増やします。また、草勢が低下すると小玉果となり、軟果玉や裂果が発生するので追肥が遅れないように注意します。

◆いちご

収穫も終盤となり、次年度用の育苗を始めます。特に、炭疽病の発生等による苗不足は収量の減少に直結します。炭疽病の発生を防止するために感染していない健全な親株を使用するとともに、感染の疑いのある苗は周囲の苗も含め早期に除去・処分するなど、万全の対策を実施します。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆共通（排水対策）

6月には梅雨期を迎えるため、5月中に、ほ場内外の排水路の整備・点検を行いましょう。ほ場内の周辺排水路や畦と直交の排水路は排水口に確実につなげます。鍬を使って排水路を作る場合、排水口からほ場内に向かって土を上げていくことで、楽に傾斜をつけることができます。

◆かんしょ

普通栽培の植え付け期です。植え付けは、なるべく曇天日や夕方、降雨前を選び、苗のしおれや葉の痛みを防ぎ、活着を促します。採苗は植え付け予定の3～5日前の午後に行い、病害防止のため速やかに、農薬処理をします。消毒液は必ず使用する当日に調製したものを用います。苗は地際から5cm以上離して切り取ると、病害回避に有効です。消毒後は、温湿度を保ちながら数日保管すると発根が良くなります。

育苗床や本ぼにおいて地際部からの茎の枯れや黒変、芋の腐敗が発生したら速やかに撤去します。その際は、他の株との接触を避けるため、撤去する株のそばまで肥料袋などを寄せ、袋に入れ込みます。苗や芋をそのまま持ち歩かないようにしましょう。株を撤去した周辺の株には予防のため防除を行います。

◆さといも

出芽が揃ってきます。5月中までに出る芽は親芋から出てきた芽であるため、2本以上出ているものは、大きい芽を1本のみ残し、他はかき取ります。また、ほ場が乾燥すると生育が遅れるため、積極的にかん水を行い、生育を促します。

さといもは、近年、疫病による大きな被害が出ています。芽が出そろったら農薬による予防を開始しましょう。その後は、新しい葉の展開ごとに農薬散布を繰り返します。

◆らっきょう

下旬から収穫期に入ります。土壌水分が多いときに収穫すると、腐敗しやすくなるため、天候に注意して収穫します。その際、ウイルスに感染した株を種球として残さないように注意しましょう。ウイルス罹病株は、葉のよじれや球が小さくびったりくっつき合い、分けにくいことで区別できます。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

今年の発芽日は平年よりも1週間程度早かったのですが、その後、低温で推移したため、開花日は平年並となる見込みです。本来ならば今年は表年なのですが、着花量は極端に多くはなく、裏年傾向の園地も見られています。新梢や着花の状況に合わせて今後の管理を行いましょう。

極早生温州みかんの火山灰土壌のマルチ栽培では、5月下旬からマルチ被覆の時期になります。園地周りから雨水が浸入せず、水はけの良い設置条件を確保し、過乾燥や減酸対策として、かん水施設を設置しましょう。

◆ 完熟きんかん

結果枝の充実促進のために、窒素主体の葉面散布やたっぷりのかん水を行い、結果枝の充実促進を

図りましょう。

また、5月下旬に発根促進剤と尿素を土壤施用することで一番果の結果安定が図られます。具体的な方法については、普及センターやJAに相談しましょう。

◆ マンゴー

今年の生育は平年並みで、5月から6月にかけて出荷最盛期を迎えます。収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、高湿度や果実結露による「やに果」や病気の発生が増加してきます。ハウス内の急激な温度変化を防ぎ、ヒートポンプや換気による除湿によって結露を防止するとともに、病害対策を徹底して行いましょう。また、内カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止しましょう。

収穫終了後、早すぎる剪定は第三新梢や第四新梢の発生を助長するため、花芽分化に向けた管理が難しくなります。翌年の出荷時期を考えながら適切な時期の剪定を心がけましょう。

(鈴木 美里)

花き

◆夏秋ギク

各種作業や電照管理は、それぞれの作型に応じて計画的に行いましょう。なお、再電照開始時期は、必ず事前に花芽検鏡を行った上で決定してください。

「精の一世」は、消灯後は完全シェードの11時間日長で管理します。7月出荷作型は幼若性を獲得する恐れがあるので、消灯前は12℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保しましょう。

◆秋ギク

採種用親株の挿し芽は、作型と穂冷蔵の有無を考慮し、所要日数を計算して計画的に作業を進めてください。キクの腋芽は高温で消失しやすいので、腋芽の伸びにくい品種・系統は親株床をできるだけ涼しくし、必要に応じてBA剤を散布しましょう。

◆スイートピー

種子の肥大を促すために、採種までは定期的にかん水及び液肥施用を行うとともに、殺菌剤を散布して灰色かび病による株の枯死防止に努めましょう。

受粉後45日程度経過し、莢の色が緑色から褐色に変わってきたら採種を行います。収穫した莢は風通しの良い日陰で乾燥させ、種子を取り出した後に必ず大きさによる選別を行い、殺菌剤を粉衣後に冷暗所で貯蔵します。

◆ホオズキ

結実時期に入りますが、極端な低温や高温は、花粉の発芽不良やマルハナバチの活動停滞を引き起こし、結果的に着果不良につながりますので、温度管理に注意しましょう。

7月出荷作型の各種病害虫防除は、6月の着色処理前に定期的に行ってください。

◆ラナンキュラス

次作用の球根掘り上げ時期となります。

地上部が8割程度黄化した時点で掘り上げますが、その際罹病株から球根を取らないようにしましょう。

洗浄・分球・ひげ根除去を行い、殺菌剤による消毒後、十分に乾燥させます。なお、消毒・乾燥効果を高めるため、特に分球をしっかりと行いましょう。

また、球根を保管する際は、容器内にシリカゲル等乾燥剤を封入しましょう。

◆シキミ

春芽の伸長から硬化時期になります。特に黒しみ斑点病ならびにサビダニ類はこの時期の防除が重要ですので、確実に実施しましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆ 家畜防疫対策

豚のCSF（豚熱）は、四月十四日に、沖縄県の移動制限措置が解除され、終息に向かいつつあります。また、ASF（アフリカ豚熱）は、東アジアでの発生が続いており、国内への侵入リスクが高い状況にあります。

これらの法定伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

さらに、新型コロナウイルスの感染拡大により、畜産物格の低下など、大きな影響が出ていますが、畜産経営では、家畜・家禽の飼養管理など毎日欠かせない作業があります。まずは、農場従事者が、感染しないように、感染予防対策を徹底しましょう。

◆ 家畜

今月は、気候が安定し、家畜の生産性が上がる時期ではありますが、日中に気温が上昇するため、温湿度環境を見ながら、細霧装置や換気対策等の飼養管理を徹底しましょう。特に、乳牛では、より低い温湿度で暑熱ストレスの影響を受けるため、ヒートストレスメーターで温湿度を確認しながら必要な対策を行ってください。

また、今月は飼料用イネやとうもろこし・ソルガム等の作付け時期です。栄養価の高い飼料作物を栽培するためには、土壌分析結果に基づく適正な施肥管理を行いましょう。さらに、今月はイタリアンライグラスの収穫時期でもあるので、適期収穫・調整を行い品質の高い自給飼料を確保しましょう。

(三角 久志)

特用作物

◆茶

1 摘採と整枝

二番茶を摘採する茶園では、芽揃いを良くするために、一番茶の摘採10～15日後頃を目途に整枝を実施します。

2 茶園の更新

樹高が高く、枝条が細くなった茶園は更新しましょう。中切りは、一番茶直後が望ましく、中切り位置は高さ40～50cm、枝幹の太さ4～5mmの位置を目安に実施します。中切り作業は、樹体の日焼け防止のため数回（5～7日おき）に分けて行いましょう。また、できるだけ曇雨天日を選んで行うと樹体への影響を軽減できます。

3 病虫害防除と施肥

クワシロカイガラムシの防除を行う場合は、幼虫の初発を確認して十日後頃が防除適期となりますので、ふ化状況を見ながら、散布ムラのないよう丁寧に薬剤を散布しましょう。特に、雄繭が目立ち枝枯れが見られる茶園では、中切りと組み合わせて防除を実施してください。

また、チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫、炭疽病やもち病・黒葉腐病等の病害に対する防除は、二番茶の萌芽～開葉期に各地区の基準に準じて実施します。

ただし、一番茶摘採期間中の降水量が平年より多い場合は、遅れ芽の下葉に炭疽病が発生する場合があります。刈り番収穫後、治療効果のある農薬を散布しましょう。

4 チャトゲコナジラミ対策

県内でも本害虫発生茶園が、年々増加しています。下記項目に従い、チャトゲコナジラミが発生していないかどうかを確認して下さい。

- ①成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や製茶工場の生葉コンテナ周囲を観察する。

(松尾啓史)

◆しいたけ

1 本伏せ

今の時期は、急な温度上昇が考えられるので、ほだ木の温度・湿度の管理に注意が必要です。仮伏せ中のほだ木は、しいたけ菌の活着が確認でき次第、南または南東向きの、水はけや風通しが良い場所に組み替えます。

裸地伏せでは、直射日光による高温や乾燥を防ぐため、笠木を三〇～四〇分の厚さでかぶせます。

林内伏せでは、落葉除去や下刈り、整理伐等により排水や通風を良くし、日陰が不足する場合は笠木等で補います。

2 ほだ場管理

高温多湿による害菌侵入等を避けるため、梅雨入り前に、防風ネット等の取り外しを行うとともに、ほだ場とその周辺の雑木雑草を刈り払う等して、通風促進を図ります。

また、害菌発生防止のため、害菌等の被害を受けたほだ木等の整理を行います。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は、わき芽除去、心止、収穫等の作業が集中します。段取りよく実施しましょう。

- 1 下位中葉着位（旧下葉）は取り遅れがないよう、心止までに収穫し、それ以降の着位は、適熟葉収穫に努めましょう。
- 2 わき芽抑制剤は、わき芽の大きさと天候に注意し、使用基準を守って散布しましょう。わき芽抑制剤使用後は、野帳・使用実績票へ記入しましょう。
- 3 心止は、地力や樹勢を考慮して、時期、深さを調整して行いましょう。曇雨天が続くときは仮止を行い、天気回復を待って止め直しましょう。病虫害を防止するため、心止後の花軸部は、除去したわき芽と同様にほ地外に持ち出し適正に処理しましょう。
- 4 病害防除対策として、排水溝の完備等、耕種的防除を中心にしながら、効果的な農薬防除による対策に努めましょう。農薬を使用した際には、野帳・使用実績票へ記入しましょう。
- 5 異物混入防止のため、ほ地でのマルチ片の回収と収穫、吊り込み、取り下ろし、及び荷造り後の葉元確認、包の確認を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

5月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち	並	補植用の取り置き苗は、葉いもちの発生源になるので、補植が終わったら速やかに処分します。 スクミリンゴガイの生息数が多いほ場では粒剤の水面施用を行います。施用に当っては水管理に十分留意し、水深が3cm程度になるように調整し、7日間はかけ流しや落水をしないようにします。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	やや少 やや多	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	アブラムシ類は各種ウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め、早めに防除します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病	やや多 並 並	べと病は換気を良くし、過湿防止に努めます。 うどんこ病は乾燥条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 栽培終了時は、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマの拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。
	ミナミキイロアザミウマ 黄化えそ病 (MYSV)	並 やや多	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病	並 並	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。 害虫類は、気温の上昇とともにさらに増殖しやすくなるので、初期防除に努め、中～多発ほ場では7日間隔で少なくとも2～3回の連続した防除を行います。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハアザミウマ タバコナジラミ	少 多 多	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病	やや少 並	葉かび病の発病葉は、生育に支障がない限りできるだけ摘葉し、すみやかにほ場外へ持ち出し適正に処理します。薬剤散布の際は、農薬が葉裏まで十分かかるように丁寧に散布します。 栽培終了時は、黄化葉巻病を媒介するタバコナジラミの拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。
	タバコナジラミ 黄化葉巻病 (TYLCV)	やや多 並	
バレイショ サトイモ	疫病	—	本病は発生すると急激に進展し、まん延するので予防防除に重点をおきます。薬剤散布は、薬液が下葉に達するように十分量を散布します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	ウメやモモなどの結実中の果樹類では、飛来に注意し初期防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 灰色かび病	並 並 —	そうか病、かいよう病に罹病している枝葉は、発生源となるため徹底的に除去します。 灰色かび病の防除適期は落弁期です。また開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので注意が必要です。 ミカンハダニは、要防除水準(寄生葉率30%あるいは10葉当り寄生虫数5～10頭)に達したら速やかに防除します。
	ミカンハダニ	並	
茶	炭疽病	並	炭疽病対策として、一番茶摘採後の基幹防除を徹底します カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努めます。 クワシロカイガラムシの薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧にいきます。また、激発園で、ふ化最盛期が一番茶後になる場合は、中切り更新して防除すると有効です。
	カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホリガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	並 並 並 やや多 やや多 並	

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

